

実践報告

児童の思いを表現につなげる図画工作科の授業づくり ー小学校第2学年の造形遊びの授業を通してー

中野 和幸*

A Lesson Plan of Art and Handicraft for fostering Childrens
Self-Expression an Imagination:
Through an Artistic Play Activities of the Second Grade
of Elemental School

Kazuyuki NAKANO*

【要約】

造形遊びにおいて、児童は材料と出あい、材料に触れながらその特徴を感じ取るとともに、様々な造形活動を展開していく。個々に展開される多種多様な造形活動を教師が見取るために、材料の特徴と場の設定を検討して題材を設定した。また、展開時の言葉かけについて、ねらいに即して検討し、実践を行った。材料と場の設定、展開時の言葉かけを検討・整理することで、児童は、生き生きと自分の思いを表現しようとすることができた。

【キーワード】

材料の特徴、場の設定、予測、教師の言葉かけ

1 主題設定の理由

図画工作科の時間、児童は、造形的な創造活動を行う過程で、表したいことを発想・構想したり、表したいことに応じて材料や用具、技法などを選択し活用したりしている。また、自分の思いを形に表したり、言葉で伝えたりしようとする。これを繰り返す中で、知識や技能を身に付け、思考力・判断力・表現力を高めている。さらに、児童は、自分の表したいことを思い通りに表現するために、自分の力を総動員して挑む。その過程や結果から、自分の思いを表現することができた喜びを味わっている。その喜びを存分に味わうことができるようにすることが、教師の役割であり、そのための具体的な支援の在り方を探る必要がある。

ところで、造形遊びにおいて、児童は、材料と出あい、材料に触れながらその特徴を感じ取るとともに、様々な造形活動を展開していく。材料に働きかけて得たイメージを基に、思い付いたことを表そうと試行錯誤を繰り返し、発想や構想の能力、創造的な技能などを総合的に働かせているのである。しかし、指導する先生からは、「材料があれば造形遊びができる」「子ども任せで何をしてよいかよく分からない」と、疑問の言葉を聞くことがある。私自身、造形遊びにおいて、子どもは楽しんでいるけれど、どんな力が身に付いているのか分からないことがあった。これは、「単に遊ばせることが目的ではなく、進んで楽しむ意識をもたせながら、発想や構想、創造的な技能などの能力を育成する意図的な学習」（『小学校学習指導要領解説図画工作編』日本文教出版株式会社2008 P15）であるはずの造形遊びが、活動の予測が不十分であったり、ねらいが明確になされず、造形活動中の支援や児童が発揮している能力への見取りが具体的でなかったりと、「意図的な学習」でなくなってしまうことに要因があったと考える。

*佐賀大学文化教育学部附属小学校

そこで、児童の表したい思いができるだけ多く実現することができるような図画工作科の授業を目指して、教師の具体的な支援の在り方を低学年の造形遊びを通して探ろうと、本主題及び副題を設定した。

2 研究のねらいと手立て

本実践では、小学2年生を対象とする。低学年の造形遊びでは、進んで材料に働きかけ、そこで見付けたことや感じたことを基に、思考や判断をし、自分の思いの実現を図ろうとする姿が見られる。そんな児童が、自分の思いを表そうと造形活動に取り組みながら、もっとつくりだす喜びを味わうとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培うことができるようにするために、教師の具体的な支援の在り方を探った。

そして、次の3つを授業づくりの手立てとした。

○ 材料の特徴

材料の特徴を検討・整理するとともに、それを基に行われる児童の造形活動を予測した。

○ 場の設定

材料を基にした児童の造形活動を予測し、その造形活動が安全でより効果的に展開されるように、活動場所、広さ、机や椅子等の配置・設置について検討を行った。

○ 教師の言葉かけ

主に授業の展開時における教師の言葉かけについて検討を行った。児童の造形活動の予測から、造形活動への意欲を引き出す言葉、造形活動が停滞しているときの言葉、児童の造形活動をより広げる言葉等を検討・整理した。

授業づくりの際、「材料の特徴」から授業時の児童の造形活動や意識の展開を予測・検討し、それを基に「場の設定」及び「教師の言葉かけ」について検討を行った。また、これらを、児童の造形活動や思考の流れを中心に作成した学習指導案の本時案（図1）に整理した。

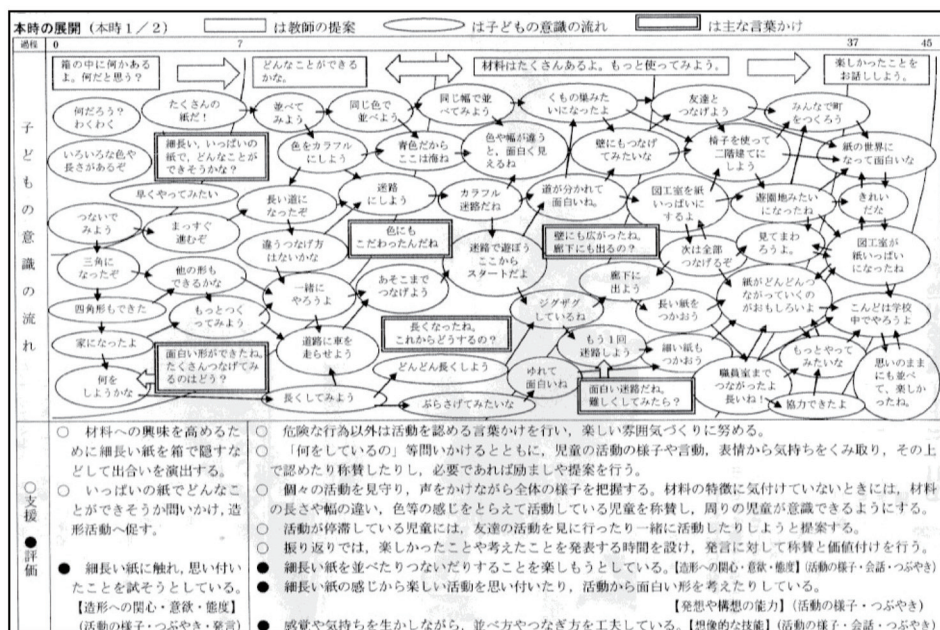


図1 学習指導案の本時案

3 授業の実際

(1) 授業実践①「ビニールテープで遊ぼう」 第2学年3組 34名 2015年6月（1時間）図工室

ア 題材について

本題材は、ビニールテープを材料とした造形遊びである（図2）。ビニールテープの特徴を体全体で味わいながら、新たな造形活動を思い付いたり面白い形を考えたりしながらつくることをねらいとした。本題材の前に、新聞紙を大きな紙とし、面としての材料の特徴をもとに造形遊びを行っていた。そこで、線での表現の面白さを感じるとともに、構成力や色からの発想力等を身に付けることができるように、ビニールテープを材料とした造形遊びを設定した。



図2「ビニールテープで遊ぼう」の様子

イ 材料の特徴について

ビニールテープは、簡単に貼ることができ、剥がして貼り直すことも容易にできる。床や壁面に貼ることができ、紐のように物と物とをつないで張り巡らすこともできる。セロハンテープのように使用できるので、児童にとって抵抗が少なく、繰り返し試行錯誤することができる材料である。また、色数があり、色からの発想も期待できる。以上の特徴から児童の主な造形活動の予測として、「はる」「ならべる」「つなぐ」「ぶら下げる」「まく」「はりめぐらす」が考えられた。授業では、1.9mm幅×10mのビニールテープの赤、白、青、黄、緑色を各12本準備した。

ウ 場の設定について

移動しながらビニールテープを貼ったり剥がしたりできる、広い環境であることから図工室で行った。造形活動の予測から床や壁面だけでなく、空間にも活動場所を広げることができるように、図工室の中央に2つ机を配置し、周りに机と椅子を置いて活用できるようにした。

エ 教師の言葉かけについて

導入として、多様な造形活動の展開を期待し、「ビニールテープでどんなことができるかな」と問いかけた。ビニールテープを用いた造形活動は初めての児童が多く、材料の特性を感じ取ることや、その特性から新たな造形活動を思い付くことをねらったからである。展開中は、一人一人の造形活動や表情を見ながら言葉かけを行った。形や色の特徴を捉え、生かしながら表そうとしているときには、取り上げて称賛し、他の児童に自然と広げるようにした。また、指示的にならないよう、児童の造形活動を見守り、児童のイメージや思い付いていることを汲み取りながら言葉进行をかけた。

オ 児童の様子

長く伸ばすことができる、やり直しができる、色がはっきりしているといったビニールテープの特徴を生かして、児童は思い思いの造形活動に取り組んでいた。床にビニールテープをはるだけでなく、壁や窓にも場所を広げていた（図3）。また、机と机をテープでつないで橋やロープウェーをつくったり、蜘蛛の巣をつくらうと椅子を活用してビ

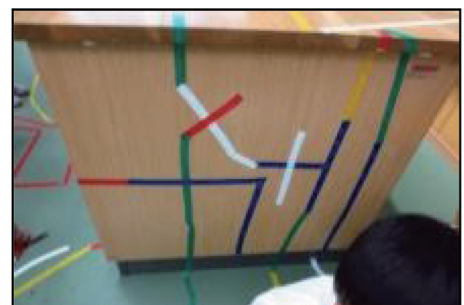


図3 壁に広がる造形活動

ニールテープをつないだり（図4）と、空間全体へと活動を広げていた。

さらに、ビニールテープを伸ばしていく過程で自然と友達と合流し、個々に行われていた造形活動がつながって、友達と一緒に活動する姿が見られた。最終的に学級全体で、材料や空間と一体となって造形活動を展開することができた。



図4 椅子を活用して

カ 考察

授業での児童の様子と、実際に発した言葉を整理・分類したものが、表1である。

児童の様子	具体的な言葉	分類
	「ビニールテープでどんなことができるかな」	問い
<p>活発に動きながら造形活動を展開している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新しい造形活動に取り組んでいる。 ・表情が生き生きとしている。 ・友達と一緒に話しながら活動している（図5）。  <p>図5 友達と一緒に</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・すごいね。 ・考え付かなかったな。 ・うわあ、すてきなものができたね。 ・そんなこともできるんだね。 ・楽しんでいるね。 ・ジグザグした形が面白いね。 ・色を使うと、テープで絵が描けるんだね。 	称賛
	<ul style="list-style-type: none"> ・つなげるんだね。 ・赤と緑の組み合わせが面白いね。 ・楽しくなりそうだね。 ・長くしていくんだね。 ・赤が入ってきれいになったね。 ・〇〇さん、面白いことしているね。 ・下からのぞくと、包まれたみたいだね。 	承認
<ul style="list-style-type: none"> ・試しながら、はったりはがしたりしている。 ・黙々と活動をしている。 ・色の造形要素に気付かず活動をしている。 ・活動しているが、表情がさえない。 ・同じ造形活動を繰り返している（図6）。  <p>図6 児童の様子</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・やりなおしができるから、大丈夫だよ。 ・やってみよう。 ・他の色も使ってみたらどうかな。 ・もう少しで届くよ。 ・悩んでいるのかな。これからどうしようか。 	励まし
	<ul style="list-style-type: none"> ・蜘蛛の巣みたいになりそうだね。 ・他に何かできないかな。 ・まだテープはあるから、もっと使ってみたら。 ・面白い迷路だね。難しくしてみたら？ ・壁でやってみたら？ 	提案
<ul style="list-style-type: none"> ・手を止めて、周りをじっと見ている。 ・つくったもので遊び続けている。 ・手がとまったままです。 	<ul style="list-style-type: none"> ・〇〇さんも同じ事をしていたよ。 ・〇〇さんのところまで伸ばしてみたら？ ・楽しかったね。もっと楽しくしてみようか。 ・みんながしていることを見に行ってみようか。 ・先生も一緒にやろうかな。 	方向付け

児童は、材料の特徴を生かした造形活動や、場の使い方等、ある程度授業者が予測した造形活動を展開していた。また、授業者は、称賛、承認の言葉かけを中心に、指示的になり過ぎないように提案や方向付けを行うことで、児童の造形意欲を促し、思いを表そうとする意欲につなげることができた。さらに、振り返りでは、児童は「ビニールテープでやりたいことがどんどん思い付いて、やってみると図工室が変わった」「最初に机にはって、はみ出したから机同士をつなげて、線路ができたけど、上からのぼしたらロープウェーみたいになった」「のぼして友達のテープとつながって、その友だちと一緒に一つながりができた」と、造形活動の変遷を話すことができた。これは、自分が思い付いたことを心置きなく試し、つくり、つくり変え、つくり続けることができた結果だと言える。これらのことから、材料の特徴から児童の造形活動を予測し、それを基に場を設定し、活動中は予測を基に言葉かけを行ったことで、児童は、より思いの実現に向かって意欲的に取り組むことができたと言える。

一方で、造形活動の広がりやねらって、新しい造形活動を行ったり、多くの色を使って表そうとしたりしている児童を取り上げ過ぎて、児童の手を止めてしまうことがあった。また、「どんなことができるかな」という問いのため、どんな活動でも認めることになってしまった。例えば、ビニールテープを転がす、はってはがす行為を繰り返すなどである。より主体的に造形的な創造活動に向かわせるために、問いや言葉かけを明確にする必要を感じた。そこで、この反省を踏まえ、次の実践を行った。

(2) 授業実践② 「いろ・イロ・色」 第2学年3組 34名 2015年9月（2時間） 児童玄関周辺

ア 題材について

本題材は、色水をつくったり並べたりする造形遊びである（図7）。題材を通して、色の特徴に気付いたり面白い並べ方を考えたりしながらつくることをねらいとした。以前に、「絵の具で遊ぼう」という題材で、にじみ絵やデカルコマニーなどの表現技法を試しながら絵の具の使い方を学んだ児童は、絵の具を混ぜて色が変わることに関心を持ち、混色について興味を持ってどんな色ができるのか試していた。しかし、児童の水彩絵の具は不透明顔料で、混ぜるほど色が濁っていた。そこで、簡単に混色することができ、透明度の高い色水を用いた本題材を設定した。



図7「いろ・イロ・色」の様子

展開では、前半は色水づくりを中心に、後半はできた色水を並べる活動を中心に行うように、問いを2つに分けた。まず、「どんな色ができるかな」と問いかけ、色水を混ぜ合わせたり、水で薄めたりしながら、試しながら色水づくりに向かうようにした。次に、「色がきれいに見えるように並べてみよう」と問いかけ、つくった色水がより綺麗に見えるように並びかえる活動に向かうようにした。

イ 材料の特徴について

食紅で色水をつくり、それを混ぜ合わせることで新たな色水をつくることのできるようにした。食紅は手に入りやすく透明度を保ったまま色をつけることができる。誤って口に入っても安全であり、簡単に色が混ざるので、変化が分かりやすい。また、水の量の調節が容易である、繰り返し試すことができる、光を透過することができる、できた色の比較が容易である、といった特徴

が考えられた。

これらの特徴から、児童の主な造形活動として、「まぜる」「注ぐ」「見る」「確かめる」「透かす」「並べる」「くらべる」「分ける」「選ぶ」が考えられた。

そこで、衣装ケースに水を入れ、赤・黄・緑の3色の食紅を用いて大量の色水を用意した（図8）。そして、できた色水を並べる際に、先ほどの活動が容易にできるように、プラスチックコップを700個用いて、全員が、多くの色水をつくったり並べたりすることができるようにした。



図8 色水の様子

ウ 場の設定について

水を使うので、水道が近く、こぼして濡らしてもよい場所とした。また、透かして見るができるように、日が当たる部分と影になる部分が混在している場所とした。さらに、できた色水を置く場所が多く、並べる際に多様な場所で活動ができる場所とし、以上の条件を満たす児童玄関周辺で行うことにした。また、置く場所に高さが出るようにと、長机と木の柱を用意して、光による気付きが生まれるようにした。

エ 教師の言葉かけについて

導入において、「どんな色ができるかな」と問いかけ、色水づくりが一通り済んだところで、「色が綺麗に見えるように並べてみよう」と問いかけた。展開中は、個々の造形活動や表情を見守りながら、表1で整理された言葉の分類を基に、称賛と承認を中心に、ねらいに即して言葉かけを行った。また、手を止めさせてしまうことが無いように、個々への言葉かけを心掛けた。

オ 児童の様子

色を混ぜて色水をつくるという分かりやすさから、色水づくりに没頭しては、出来た色を授業者や友達に見せたり、新しくつくった色と比較して新しい色をつくろうと考えたりしていた。

中には容器を重ねて、色水の層をつくりだした児童もいた。児童は、量の加減のほか、水道水を使って薄めることでより多くの色水をつくることに気付く、新しい色をつくったり、友達から色水のつくり方を聞いたりしながら、つくり続けていた。また、できた色水を光に透かして色を確認めたり、長机の上や柱の上に並べて（図9）、お互いの色を見比べたりしていた。

容器が無くなるまで繰り返し色水づくりに没頭することができたが、できた色水を無造作に置いたり、光の当たらない場所に並べたりしており、それぞれの色の比較や色の並び方等に目を向けることができていなかった。容器が無くなりかけたところで、「綺麗な色水がもっと綺麗に見えるように並べよう」と問いかけると、色ごとにまとめたり（図10）、並べる場所を探したりと、自分たちが



図9 長机に容器を並べる様子



図10 色ごとにまとめる様子

つくった色水をどのように見せるかに意識が向くようになった。色水づくりで色に着目していたので、並べた形よりも、色がどのように見えるかを中心に並べることができ、グラデーションになるようにしたり、色ごとに固めたりしていた。その際、長机の上に置いて横から見たり、地面や柱に並べて上から見たりと、周りの場所を利用しながら様々な見方で楽しむ姿が見られた。場所を移動して見え方を試す姿も見られた。

カ 考察

本題材では、問いを2つにして、色水をつくる活動と、つくった色水を並べる活動とに分けた。造形活動を分けたことで、言葉かけが明確になり、児童の造形活動の見取りに余裕が生まれ、個々の児童の思いや気持ちを汲み取って言葉かけを行うことができた。

色水をつくる活動においては、児童は、どんな色になるのか考えながら、量を調節したり、色水を重ねたりして楽しんでいた。新しい色や方法を発見すると、自然と「どうするの？」と輪ができ、児童同士交流しながら自分なりの色をつくりだしていた。授業者は、「いい色だね」「そんな色もできるんだね」「元気が出そうな色だね」と、色に対して、児童と一緒に驚きながら称賛や承認の言葉かけを行った。何度でも試すことができる材料、場の設定が、児童の思いをより表そうとする支援となったと考える。そして、児童がつくりだす喜びを味わうことで、他の色もつくりたいと、別の思いの実現へと向かっていくことになったと考える。

色水を並べる活動においては、プラスチックコップや長机、柱とともに、太陽の光が児童の思いの実現のために効果的だった(図11)。つくった色水をより綺麗に見えるように並べる際、光が当たることで水面が輝いて見えたり、色が一層はっきり見えたりして、色が変化する面白さや美しさに気付くことができた。また、授業者は色の変化やまとまりについての気づきや造形活動に対して、称賛や承認の言葉をかけながら、見守ることができた。教師の指示ではなく、自分たちで目的を見付け、その実現へ向かっていくには、見守られていることや、安心して挑んだり失敗したりすることができることを、児童が感じ取っている必要がある。



図11 太陽の光で輝く色水

児童の振り返りにおいて「自分でつくりたい色をたくさんつくることができた。できた色を置くと、色が変わったので、いろいろなところに置いてみた」「3つの色なのにたくさん色ができてびっくりした。似たような色でも、よく見ると違ったので、友達とたくさん色をつくった」「いっぱいつくれたし、いっぱい並べられた。虹みたいに並べたいと思って並べて見たら、虹みたいになって嬉しかった」など、自分の思いをもって生き生きと表そうとしたことや、思いが実現できた喜びを感じていることが伺えた。

以上のことから、材料の特徴をもとに児童の造形活動を予測し、造形活動を広げる場の設定を行うことで、児童が思い付いたことをすぐに試したり表したりすることができたとと言える。また、教師の問いや言葉は、児童の活動を方向づけ、児童が自信をもって思いを表すことにつなげることができる。さらに、言葉かけの内容を整理・分類して授業に活用したことによって、ねらいに即して個々の児童の思いや気持ちを汲み取りながら言葉かけを行うことができ、児童の造形活動への意欲の促進につなげることができた。

4 まとめ

(1) 成果

- 材料の特徴から児童の造形活動を予測し、造形活動を広げる場の設定を行うとともに、展開中に適切な言葉かけを行うことで、児童の思いを表現につなげることができた。
- 題材のねらいを明確にし、それに即して言葉かけを行うことで、児童は、思いの実現に向かって力を総動員し、自信をもって表し続けることができた。
- 言葉かけの内容を整理・分類して活用したことで、ねらいに即して児童の思いや気持ちを汲み取りながら言葉かけを行うことができ、児童の造形活動への意欲の促進につなげることができた。

(2) 課題

- 中学年や高学年における造形遊びにおいて、児童の思いを表現につなげるような教師の手立てについて検討・整理し、検証を行う。
- 絵や立体に表す題材においても、児童の思いの実現のための教師の役割や手立てについて検討し、検証を行う。

【参考文献】

- ・文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説図画工作編．日本文教出版株式会社
- ・岡田京子編著（2015）学び合いが高め合う「造形遊び」．東洋館出版社
- ・藤江充・岩崎由紀夫・水島尚喜編著（2009）形・色・イメージ+これからの図画工作．日本文教出版株式会社
- ・佐賀県造形教育研究会（2011）第27回佐賀県造形教育研究大会唐津大会．大同印刷株式会社